

引くことで表れる組紐の魅力 若きデザイナーで、組紐の未来を組む

松島 康貴 三重／組紐職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家・東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)、アート・プロデューサー(下川一哉氏(意匠研究所))らをサポートメンバーに発注。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティーイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

ギャラリー・高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「THE NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。



1月17日、プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。三重県選出の匠、松島康貴さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

組紐らしさから生まれた「脇役」の存在意義

伊賀くみひもの起源は古く、奈良時代以前にさかのぼるといわれ、当初は経巻や仏具・神具の紐として用いられた。伊賀地域の気候が養蚕に適していたこと、また文化の中心である京都に近いことなどもあり、明治時代中期から本格的に産業として発展した。



鮮やかに染色された絹糸

絹糸を主に、金銀糸などを組糸に使い、角台・丸台・高台などの伝統的な組台を用いて繊細な美しさをもつ紐に組み上げたもので、「帯締」「羽織紐」などと和装には欠かせない工芸品だ。昭和51年から経済産業大臣指定の伝統的工芸品に



下川氏(左)からアドバイスを受ける松島さん

指定されている。

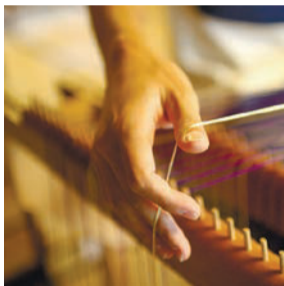
松島さんは、今回のプロジェクトで誰もが使う商品と考へ、組紐を前面にアピールしたランブッシュェードを考へた。しかし、キックオフ・セッションで下川氏から「もっと組紐らしさができるように。さらに和を追求したものを見たい」とアドバイスを受け、「組紐らしさ」とは何だろうと考へた。松島さんが出した答えは「脇役」だった。例えば脇役である帯締は主役の振り袖をより華やかにする。つまり組紐は主役を引き立たせてくれる縁の下の力もちだと考へついた。

向き合うことで気づいた

奥深さと魅力

組紐職人である松島さんは、3代続く松島組紐店の次男として生まれた。昨年開催された伊勢志摩サミットで、世界の記者らに配られたお土産「伊賀くみひもの品」の製作に関わった店だ。

幼少期から祖父や父親の姿を見ていたからか、モノを作ることが好きだったという松島さんは、迷わずデザイナーの専門学校に進学した。この時はまだ組紐職人になるという考へはな



指先の微妙な力加減が要求される

く、工業デザインを学び、デザインを目標していた。組紐との接点は、卒業制作のとき。工芸品のデザインを知って関心を持ち、組紐で作る自転車のオブジェを考へた。「デザインで革新を起こしたい」と考へ挑戦。木製のハンドルやフレームに組紐を合わせ、美しさを表現した。染色技術や、組目の表情など組紐の魅力をアピールできるよう考へた。組紐の美しさは作る過程にあると考へ、車体から放射線状に延びる絹糸で組まれていく過程を表現した。苦労したが一番組紐の良さが表れている部分だという。作品は評価され、大阪府知事賞を受賞した。



松島康貴 三重／組紐職人

1992年生まれ。大阪デザイナー専門学校プロダクトデザイン学科卒業後、2014年松島組紐店に入社。専門学生時の卒業制作「LINK」で大阪府知事賞、美濃和紙あかりアート展「水紋」を出版し、アート賞を受賞。

そこで考へたのが時計のベルトだった。商品名を「UN Sung」と決め、数ある組み方の中から「高麗」と「三好」と呼ばれる組み方を選び、2種類のベルトを発表。高麗組は伊賀くみひもの代表的な紐で高台を用いた、表裏2枚で形成される格調ある美しさを

持つ組み方。この組み方を取り入れることでベルトは表裏で素材と色が異なり、表が絹、裏を綿にした高級感ある商品となっている。

三好組は重打台を用いた13玉で組まれた組み方で、目の粗さが出るのが特徴。夏物の帯締を参考に作られており、見た目にも爽やかな印象だ。また手組みならではの力加減で徐々に先を細くし、機械組みではできない味わいを出した。さらにベルトの先を留める革は学生時代の友人である革職人に特注で作ってもらったものとなっている。2



完成プロダクト「UN Sung」 ※「UN Sung」は「Unsung Hero＝縁の下の力持ち」より命名

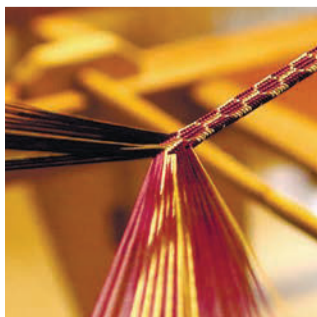


高台を用いて帯締を組む松島さん

ートをしながら修行をしてきたが、組紐への思いとモノづくりをしたいという意欲が高まり会社を退職、実家の松島組紐店で組紐職人になることを決意した。組紐職人となって5年。組紐の難しさと魅力が日に日に感じられ、その奥深さを知り始めた。

伊賀では組紐の大半が帯締や羽織紐などの和装品として製造されている。一定の需要はあるものの、年々減ってきており、30数年前は百件近くあったメーカーは、現在4分の1まで減った。

を盛り上げたい。私はこの地域が好きだ。業界が盛り上がり、松島さんは言葉を選びながら話した。自転車のオブジェやランブッシュェードなど、これまでの作品制作で組紐の新たな可能性を提案してきた松島さん。今回のプロジェクトでは、その提案力と伝統技術とを結び付けることで組紐の新たな価値を見つけ出し、「商品」として結実した。組紐の未来に思いを込めた若き職人の挑戦が始まった。



LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。